



ジャン・バニエの手紙

2011年9月、トロリーにて

親愛なる友人の皆様

オーヴァルにある修道院での、私の安らかな休息は、ドタバタで始まりました。



私は、修道院の大ホールで行われるリトリートで、若者たちに講話をするよう頼まれていました。その講話の滑り出しは上々だったのですが、突然、ドスンと椅子から落ちてしまいました。私の座っていた椅子が壊れてしまい、訳がわからず、背中を下にして大の字になった自分がいたのです。講話を聴いていた若者たちの何人かが、ぱっと前に飛び出して来て、テーブルの後ろで私が立ち上がるのを手伝ってくれました。私はテーブルの前で、もっと頑丈な椅子に座り直しました。そうして、私は、イエスが地面にひざまずいて、どのように弟子たちの足を洗ったについての話を続けることができました。夜間、少し違和感を覚えた肋骨部分の打ち身以外に、大した怪我はありませんでした。お医者さんは私に説明してくれました。「あなたにできることは何もありません。ただ少しお待ちください。そうすれば、また完全に元に戻りますから。でも重いものを持ち運びするのは、避けてください」と。そう、待つことは、即ち希望すること。

オーバルでのリトリートの若者たち

その二日後、修道士さんたちと、ちょっとした屋外へのピクニックをしたときのことです。りんごジュースの入った私のグラスに、だれの目にも留まることなく、一匹のハチ（蜂）が入り込んでいました。ハチがいることに気付かず、私はジュースを飲んでしまいました。当然のことながら、私は、そのちっちゃなハチも口に入れてしまいました。



幸いにも、そのハチに気付いてくれた一人の若者が、私の口の中にハチが消えていったのを見て、すぐに警鐘を発してくれたお陰で、私はなんとか、そのハチを吐き出すことができました。明らかに、私の口の中という刑務所に閉じ込められた自分に気付くのは、あまりわくわくするものではなかったでしょう。ですから私の口蓋を刺すことによってハチは、自分のご立腹だということを表現したのです。その後、可哀相なことにハチは、りんごジュースの中で溺れてしまいました。すでに前回の不運を目撃したお医者さんは、ご自分の専門的アドバイスをしてくれました。「角氷を口に入れて、腫れが退くようにしてください。残念ですが、それだけです。」数時間でことは片付き、刺された痛みは過去のこととなりました。

私は、これらふたつの出来事に何か象徴的なことを探し求めている訳ではありません。たとえ、このような大したことのない「ご不便」があるとしても、私の体は祈りの場であり、私の口はまだ、何か本質的なことについて話すように呼ばれていることを受け入れるために学んでいるのです。

私がヨハネ福音書でさらなる発見をしたのは、平和と祈りに満ちたオーヴァルの修道士さんたちといっしょに、祝福された静けさのうちにいたという、そのようなすばらしい時間のときでした。ヨハネは、最愛の弟子と呼ばれていましたが、その呼び方は彼が、すべての弟子の中で一番、愛されていたという

ことを示すためではなく、私たち一人ひとりのアイデンティティのように、ヨハネの最深のアイデンティティは、イエスによって、神によって愛され、そして呼ばれているはずだというものでした。私が「発見する」というのは、発見が人の心や霊を開くというのが真理だからです。言葉を通して、毎日の生活体験を通して、そして祈りやあれこれの集いの時を通して、心から心へ話しかけるように、一度に一步ずつ、神を発見するよう手助けするのではなく、その代わりに、おそらく私たちは、あまりにもしばしば、人々の心の形を造ろうとして、はっきりした考えを伝えようと、イエスについて教えたがります。そういった発見は、平和と喜びをもたらすイエスとの新たな出会いに向けて、心を開くという啓示として、予期せず突然にやってきました。この出会いは、私たちが自分で造れるようなものではありません。贈物として、やってきました。神からいただいた、完全な喜びであり、祝福です。実際、発見するのは私ではありません。そうではなく、神がご自分を発見されるようにしているのです。

私がこの修道院に着いた初日、鐘楼の周りを、あちこちスイスイと飛び回っていたツバメたちは、夏も終わりが近いことを感じたに違いありません。ツバメたちにとって長旅になりますが、北アフリカへ向けて全員が去って行きました。そして今や、彼らの巣の中は空っぽとなり、そのことが私の一日を悲しみで染めるのです。

今、私はまた、数年前に亡くなった J. レシンスキー神父の著書を読んでいます。彼はラルシュの良き友人で「Work for All in Dignity, Fourth World or ATD Fourth World (第四世界あるいは ATD 第四世界、尊厳のうちに活動する)」を創立された方です。この第四世界、また ATD 第四世界というのは、社会の隅に追いやられた人たち、屈辱のうちに押し出され、落とされた人たちを支える活動です。この活動の基本的な目的は、第四世界の人たちに、物質的な支援をするのではなく、人間としての本当の自分を発見し、自分の中に誇りを取り戻し、自信を取り戻すことを手助けすることです。J. レシンスキー神父は、「貧しい人たちは教会です」(今、私が読んでいるこの本のタイトルにもなっています)と言うのが好きで、口ぐせでした。悲惨さが絶望の苦しみの叫びである人たちは、神に近く、そして神はそういった人たちに近いのです。

レシンスキー神父が最初にやったことは、最大の謙虚な気持ちで彼らと出会い、ともに時間を過ごし、そして神の存在のかすかな光をもたらす贈物として彼らをみながら、深い尊敬の念をもって彼らに耳を傾けることでした。この本は、J. レシンスキー神父が、よくラルシュへ来て、私たちに話をしてくれた時の記憶を、呼び覚ましてくれました。私たちは変えられる必要があること、そうすることで私たちは、この地上の貧しい人たちとともにいることができるということ、神が預言者イザヤに与えてくださった言葉「わたしは、高く、聖なる所に住み 打ち砕かれて、へりくだる人々と共にある」というイザヤ書 57. 15 を思い出しながら、よく話してくれました。神は、社会の底辺にいる人たちの近くにおられ、もし私たちがその人たちの近くにくっついて



ヨセフ・レシンスキー神父

いるならば、私たちは真の心の喜びを見出すということを、私の現状からして、(言葉と行いによって)私の人生の宣教になればと心から願っています。

閉め出された人たちと出会う必要があること、その人たちに ATD のような友情のネットワークを提供する必要があることを主張していた J. レシンスキー神父のような方がいらっしやったことは、なんと幸運なことでしょう。それは福音の道であり、同様に、ラルシュの道でもあります。

もうすぐ私は、トロリーへ戻ります。私の刺すような激痛は、もうなくなりました。

パトリックやディディ、アニセットやステファニー、そして皆がいっしょにいる家に帰れるのを私は嬉しく思います。食事の時間や洗い物といったシンプルな生活に戻ることに、また、皆がいっしょにお祝いと祈りの時間を生きられることを、嬉しく思います。

私の喜びは、重荷を皆でいっしょに担う共同体の一部であることです。

私は、La Ferme (農場という名の家) でリトリートをやりたいと思います。これは私にとって、特別な喜びです。そして私は、いつかパリでジュリア・クリスティエバといっしょに、講話をしようと

思っています。私は彼女といっしょに、フランス語でしかないのですが、「*Leur regard perce nos ombres* = (彼らの見つめる目は私たちの暗闇を刺し貫くもの、と訳せるか)」というタイトルの本を書きました。この本は交換書簡であって、私たちが最も大切だと思うことを表現することができました。

トロリーでは、変化が起きています。2012年の9月付けで、クリスティン・マクグリーヴィが12年間の国際副コーディネーターを経て、私たちの責任者と羊飼いになることが決まりました。彼女は有能さと献身をもって、8年間、共同体を導いてくれたキャロル・オケツキーから引き継ぐことになります。クリスティンが、この責務を引き受けてくださることは、真の贈物です。彼女は、トロリーに国際的な香りをもたらしてくれることでしょう。

そしてまた、同時に彼女は、30年間キューズにいましたので、私たちの共同体のことを、よくご存知です。

キャリオサ・キルカモンズは、私たちのところを離れ、フレンチアルプスの近く、シャンベリーにあるシーコモアの共同体リーダーになります。彼女は、このトロリーに22年間いましたので、皆が寂しがることでしょう。でも私は彼女のためにも、シーコモアの共同体のためにも、とてもよかったと思います。



ラモーの家の修理風景

私自身に関することと言えば、今年もひとつの通過点がやって参ります。私も83歳になりました（自分でも信じられません）。そして将来、また新たな弱さと同時に、新たな贈物をいただくことになるでしょう。それは、たとえばどのようなことでしょうか。ジャン・クリストフとクリスティンは、私が36年間住んできた私の小さな家とおさらばして、La Fermeのそばにある小さな家に移ってはどうかと、熱心に主張してくれました。ラルシュの友だち財団が、リフォーム作業の担当です。そうなれば、私の体のどこかが新たに悪くなったとしても、もっと簡単にわかるようになり私は助かります。それにエレベーターも付いてい

ます。私の新しい家の横には、私の健康と老化を見張る仕事を任されたオディールのための宿泊室があります。ジャン・クリストフやクリスティン、同様にオディールや財団の理事の皆様が、私のことを思ってくれていることを、私は嬉しく思っています。

この小さな家には、居間がありますので、長い間 — ある人たちとは47年にもなります — 暮らしを共にしてきた共同体の人たちの小グループと集うとき、お茶やちょっとした食べ物を、お出しすることができます。

ギリギリのがけつぶちへ押しやられた人たちという、私たちのようなタイプの共同体は、新しい形の共同体を生み出すきっかけになっているようです。今日、フランスにおいては、路上生活者や他の種類の障がいを持つ人たち、あるいは精神病者の小さな共同体が、造られています。孤独は、苦悩の重要なファクターです。たとえ人間関係という落とし穴が内在するとしても、いっしょにいるということは、喜びと安心の源です。かつて路上生活をしてきた男性が、私に言ったことがありました。「*社会福祉は私にアパートを与えたりしますが、ひとりで生活するというのは、正直、ぞっとします*」と。当然のことながら、これらの新しい共同体は、新たな命を得るため分かち合いの生活を推進することのできるリーダー、食事やお祝い、そして避けることのできない対立が起こったときに招集される会合を鼓舞することのできる人を必要とします。

これらの、いろんな形の共同体の目新しいところは、受け入れられる端っこに追いやられた人たちと、彼らといっしょに住む人たちの両方にとって、共同体が癒しの源であるということです。これらは、他者に対して慈善活動を行う、単なる理想社会活動家ではなく、シンプルで、愛を感じられる人間関係の生活によって癒されるヘルパーなのです。

愛するという柔和な行動、そして正義と平和を求めて働く柔和な行動において彼らは、自分たちの成長の場を見つけるのです。

預言者イザヤは、すでにイザヤ書58、7-8で言っています。

「飢えた人にあなたのパンを裂き与え
さまよう貧しい人を家に招き入れ
裸の人に会えば衣を着せかけ
同胞に助けを惜しまないこと。
そうすれば、あなたの光は曙のように射出で
あなたの傷は速やかにいやされる。
あなたの正義があなたを先導し
主の栄光があなたのしんがりを守る」と。

すべてを失ったと思い、ギリギリのがけっぶちで叫ぶ人たちの存在、そしてその人たちの友情を求める叫びは、私たちを変えます。彼らは、私たちの愛や光を呼び覚まします。もちろん、このような人生は要求がましく、私たちを激怒させることがあります。しかし神は、そのことに価値があることをご存知です。イエスは、真にここにおられます。貧しい人たち、傷つきやすい人たち、そして弱い人たちの中に隠れておられます。認識できない時でもおられるのです。私たちが最も小さい人たちのために何かをしようとも、私たちは、イエスのためにしているのです。そして共同体生活は、命の源、まったく異なる人たちの一致の源、そしていろんな異なるレベルで、人間的そして霊的道を生きる人たちの、一致の源になるのです。

共同体生活は、要求がましくもないし、祈りの時間や内心の命を深める時間を削ることもないなどというふりをしないようにしましょう。私たちが必要な、リラックスしたりリフレッシュしたりする時間は、なかなかやって来ません。いたってすぐに、私たちは「兄弟的仲間意識」よりも、どちらかというところ「お勤め」と思ってしまうようなことに、囚われてしまうことがあります。私が、しばしば手紙の中で言及してきましたエッティ・ヒルサム女史は、他者に対する愛と思いやり、そして神との一致を調和させようと努めました。とりわけ、ヴェスターボルク強制収容所で彼女は、苦しみの世界の中にすし詰めされた数千人のユダヤ人の光や支えになろうと、頑張りました。彼女は、次のように書いています。

「私の中に深い井戸があり、そしてその井戸の中には、神がおられます。時々私は、なんとかして神にたどり着こうとしますが、あにはからんや、大抵の場合、神は井戸をふさいでいる石や粗石の下に、潜んでおられるのです。ですから私たちは、自分たちの中の深い所、ふさいでいるものの背後に神を見つける努力をするよう、強いられています」。

彼女は、神の腕の中にいること、そして「小さな、心の中の声」に耳を傾けることについて語ります。その心の中の声は、立ち止まって、神がすぐそばに来てくださるのを待ちなさいと、彼女に呼びかけているのです。これって黙示録の中で、はっきりと宣べられているものと同じ小さな声ではないでしょうか。そこで神は、このように言っておられます。

「見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。だれかわたしの手を聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者と共に食事をし、彼もまた、わたしと共に食事をするであろう」(黙示録3章20節)。

主と共に食事を分かち合うことは、主と友だちになること、そして主のように善良で思いやりのある人になることです。

心の命と神との交わり、そして弱い人たちとの仲間意識の間の調和を見つけること。このような弱い人たちによって自分自身を形造っていただくようにし、あまりにも早く活動に飲み込まれてしまわないようにすること。これは、ある意味、チャレンジです。私たちのチャレンジです。ただひとつの愛があるということを見出すこと。これって最愛の弟子ヨハネが手紙の中で言っていたことではありませんか。

「目に見える兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することができません」。そうなのです、これは私たちが神から受けた掟であり、神を愛する人は、兄弟をも同じように愛しましょう(1ヨハネの手紙4章20節)。

私は前回の手紙の中で、マリー・エレン・マチューによって書かれた信仰と光の歴史に関する本の出版が（フランス語で10月の予定）、将来、ありますよと書きました。私は皆様に読まれることをお勧めします。この歴史はとても感動的です。弱い人たちとの結び付きは、命の源であるということ、私たちが発見したのは「信仰と光」の1971年の巡礼のときでした。この弱い人たちは、人間の体の部分であり、教会の体の部分であります。彼らは、この体に必要とされる重要な何かを持っています。彼らは、まるで人を愛の道から離れて行かないように踏みとどまらせ、そして異なる人を受け入れるのを、あざやかに思い起こさせる人たちのようです。

ラルシュや信仰と光の一人ひとり、そして非常に多くの、世界中の友人のことを、どれほど私が思っているかを申し上げて、私はこの手紙を結びたいと思います。

皆様からのお便り、そして私たちをひとつに紡ぐこの交わりにとても感謝しています。

この交わりは、まるで祈りの広域ネットワークです。世界で、非常に多くの人たちが苦しんでいます。中東における辛い、悲劇的な対立。他にもアフリカ中央部や他地域における絶望的空腹で永遠と続く飢饉などです。

私は、生きていることを嬉しく思います。そして長い年月の人生を、神に感謝いたします。

同時に、私は苦しんでいるすべての人たちと、深くつながり続けたいと思います。エッティ・ヒルサム女史が、一通の手紙の、結びのことばで言うておられるように「ただ、もし私たちが鎮痛効果のある香りの軟膏のように、とても多くの傷に塗られたら」と思いつつ。

皆様を私の心に温かく抱きつつ。

ジャン・バニエ